

2025 年

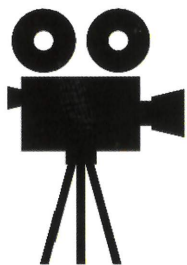
11/9
(日)



一般 ¥1,000

障がい者・学生 ¥500

高校生以下、無料です



板橋区立

文化会館 (小ホール)

その炎は生き続けるー



ちawanやの
はなし

ー四百年の旅人ー

上映会のご案内

★タイムスケジュール

13:00 開場

13:30～ 上映開始(117 分)

15:30～16:20 李鳳宇氏
(企画・プロデュース)の講演

主催：東京朝鮮第三初級学校とともに歩む会 共催：東京朝鮮第三学区女性同盟

★チケットのお問い合わせ(歩む会)

070-3982-9514 (伊丹) ※出られなかった場合は、後ほどこちらから折り返します。

E-mail : chesamtomoni@gmail.com

Story

わたしたちは、故郷を想い＜未来＞を見つめる―

遡ること420年前、豊臣秀吉の二度目の朝鮮出兵の帰国の際に、主に西日本の大名たちは朝鮮人陶工を日本に連れ帰った。薩焼、萩焼、上野焼などは朝鮮をルーツに持ち、今もなお伝統を受け継いでいる。

薩摩の地では、島津家が彼らを厚く庇護をして苗代川という地に住まわせた。その中に沈壽官家の初代となる沈当吉がいた。以来、沈壽官家は研磨を重ね多彩な陶技を尽くした名品の数々を世に送り出し、世界中に“SATSUMA”の名が広がった。

幼少期に経験した言われなき偏見や差別の中で、日本人の定義とは何かと自身のアイデンティティに悩んだ十五代沈壽官を救った司馬遼太郎の至宝の言葉。

その十五代沈壽官が修行時代を過ごした韓国・利川にあるキムチ甕工房の家族は、十五代から学んだ伝統を守る意義を語る。沈壽官家の薩摩焼四百年祭への願い。

そして、十二代渡仁が父から受け継いだ果たすべき使命。十五代坂倉新兵衛が語る父との記憶と次の世代への想いとは。

朝鮮をルーツに持つ陶工たち、その周囲の人々の話が交差し、いま見つめ直すべき日本と韓国の陶芸文化の交わりの歴史、そして伝統の継承とは何かが浮かび上がる。

板橋区立文化会館へのアクセス



東武東上線「大山」駅 北口から徒歩約3分

都営三田線「板橋区役所前」駅 A3 出口から徒歩約7分

※一般来場者の駐車スペースはありませんので、公共交通機関をご利用ください。